

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	熊谷 哲哉
論文題目	ダニエル・パウル・シュレーバーの言語をめぐる思考 -科学の時代における自己と世界-		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、フロイト以来、精神病症例の古典とも目されているダニエル・パウル・シュレーバーの『ある神経病者の回想録』(初版1903年)を、とりわけ言語をめぐる彼の思考というテーマを中心に据えて読み解き、そうするなかで、科学的実証主義全盛の世紀転換期ドイツにおける思想的・宗教的・文化的・社会的な変動のありようを、多角的かつ具体的に浮かび上がらせることを目的としたものである。シュレーバーはこの浩瀚な『回想録』のなかで、自らを襲った奇矯な妄想的現実をありていに言葉にしているが、それはシュレーバーひとりのうちに閉ざされた個人幻想であるばかりでなく、その背後には、言語をはじめとして、この時期の社会が抱えているさまざまな問題が交錯している。本論文は、夢、無意識、宇宙進化論、心霊主義など、当時の怪しげなオカルト的思考領域に踏み込むこともあえて辞さず、また文学・芸術の領域にも眼を注ぎながら、それらの問題を多角的に抉り出してゆく。論文は序章と最終章を前後にはさんで七章立てになっており、本文中に数多くの注がちりばめられているとともに、巻末には欧文、和文の詳細な文献表に並んで、シュレーバーの使用する独特の用語集や人名索引が付されている。</p> <p>序章「ダニエル・パウル・シュレーバーと『ある神経病者の回想録』」では、まずこの『回想録』を解読するにあたって、その概要と、これまでの受容史ならびに著者シュレーバーの人物像・経歴が簡単に説明されるとともに、シュレーバーの病が本質的に言語にかかわるものであることが予示される。</p> <p>第1章「言語をめぐるたたかい-録音再生装置と雑音の世界」では、思考をかき乱す雑音と、それに対する防衛としての音楽との関係から、雑音と言葉のせめぎあいとしてのシュレーバーの思考のあり方について論じられる。</p> <p>第2章「光線としての言葉-世界の可視化への欲求」では、シュレーバーにおいて言葉が「光線」として表現されていることに着目し、すべてを可視化しようとする当時の自然科学・心霊主義との関連について説明される。</p> <p>第3章「神経と宇宙-カール・デュ・プレルとシュレーバー」では、人間の思考と記憶の座ならびに神との関係の結び目としての神経の特別な位置に着目し、シュレーバーの思考に強い影響を与えてきたデュ・プレルの宇宙進化論とのつながりが示唆される。</p>			

第4章「教育者と医者-「魂の殺害」と迫害体験」では、『回想録』で「魂の殺害」と称されているシュレーバーの受けた迫害が、さまざまな資料をもとに、父親モーリッツならびに主治医フレックシヒと神との関係から考察される。

第5章「「脱男性化」とは何か」では、神によるシュレーバーの身体の女性化（脱男性化）について、フロイトをはじめ多くの解釈を検討するとともに、世紀転換期における身体観や性意識の変化がもたらした意味について考察する。

第6章「神経言語と言語危機の時代」では、シュレーバーの「神経言語」という用語の背後に広がる問題を、ヘルマン・バルやホーフマンスタールなど当時のモダニズムの文学者たちの新たな言語表現への模索と絡めながら考察する。

第7章「目的・深化・自由意志-神と自然をどうとらえるか」では、シュレーバーの世界観のなかに、ダーウィン／ヘッケル流の唯物論的自然観（自然進化論）と、デュ・プレル流の唯心論的自然観（宇宙進化論）とが同居していることを問題とし、この矛盾した同居がどこから来ているのかが、双方の資料をもとに詳しく論じられるとともに、シュレーバーにとっての書くことの意味が大きな視点から考察されている。

最終の第8章「シュレーバーと神、そして新たな人類」では、本論文のまとめとして、シュレーバーと神の関係（合体と反発）に焦点が合わせられ、シュレーバーが女性化して神とのあいだに新しい人類を残そうとすることがどのような意味をもっているのかについて論じられるとともに、シュレーバーにおける言語をめぐる思考の特性について総論的にまとめられている。

以上のように本論文は、フロイト＝ラカンの精神分析の文脈でこれまで重要なテクストとして取り上げられ、あるいはファシズムや反ユダヤ主義、人種論などさまざまな方面から問題視されてきたシュレーバーの『回想録』に、言語哲学的なテーマのもとに深く分け入り、言語のもつアクチュアルな問題に迫るとともに、この書が当時のさまざまな思考が集積する結節点であることを具体的に明らかにしようとしたものである。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

ダニエル・パウル・シュレーバーが自らの症例を語った『ある神経病者の回想録』は、これまで、フロイト＝ラカンの精神分析の文脈でパラノイアならびにその言語的特性の分析という観点から研究対象に取り上げられ、また、それとのつながりのなかで、シュレーバー自身に関する詳細な伝記的研究がなされるとともに、シュレーバーの紡ぐ妄想が当時の大衆科学やオカルティズムなど、いかなる時代背景から発しているかがさまざまに探求されてきた。そして、そこからのさらなる広がりとして、ジェンダー、ファシズム、反ユダヤ主義、反資本主義、メディア論、文学表現など思想上、文化史上の問題をはらんだテキストとして熱い研究の眼差しが注がれてもきた。完全な邦訳がすでに二種類も刊行されているなど、わが国でもシュレーバー研究はいよいよ本格的になりつつある状況である。本論文は、そうしたシュレーバーの『回想録』に照準を合わせ、以上すべての観点を網羅的に取り込んだ上で、とりわけシュレーバーの言語をめぐる思考を中心テーマとして、これらの研究にさらに独自の一步をしるそうとする意欲あふれるものである。シュレーバー研究において本論文が達成した評価すべき学問的意義は、以下の三点に集約することができる。

(一) これまでのシュレーバー研究はいずれも、晦渋な『回想録』に対して、どちらかという、自らの関心領域にスムーズに取り込むことができるものだけを部分的に解説の対象とし、他の要素を視野の外に置くといったきらいがあった。シュレーバーの妄想を父親に対する同性愛的傾向の否定に源をもつとする、よく知られたフロイトのパラノイア論などにも、シュレーバーに対する当時の伝記的研究などの欠如のせいもあり、そうした傾向が顕著に見受けられる。本論文は、こうした点に鑑み、いわばテキスト全体に現れているシュレーバーの世界観の全体像に照明を当て、彼の特異な言語新作の解説を通してそれを再構成しようとする。「神経接続」「神経言語」「魂の殺害」「妨害」「思考強迫」「人間玩弄」「光線」「筆記制度」「描き出し」「根源言語」「浄化」「脱男性化」「目的思考」等々といった、いわゆる統合失調症の新作言語に近い面妖なシュレーバー用語が、ひとつひとつばらばらに切り離されて問題にされるのではなく、シュレーバーの妄想世界の全体像のうちに位置づけられ、読み解かれる。そうした意味で、本論文は、シュレーバーの世界を、視点先取的に解釈するというよりもむしろ、そのなかに自らのめりこみ、シュレーバーにとってのその現実性を浮かび上がらせようとするものであり、あえてそうした基盤に身を置いて-独断的切り込みを避けて-そこからシュレーバーのテキストにはらまれる問題点を抉り出そうとする、ある種困難な課題を引き受けようとするものとなっている。本論文は、ある程度この課題をこなしていると言ってよく、論文全体がいわば、これまで類を見なかった貴重な「シュレーバー辞典」のごとき様相を呈してもいる。

(二) 本論文は、シュレーバーのこうした世界像ならびに新作言語の解説にあたって、科学的思考の全盛だった当時の学問状況のなかで、あえて非学問的な大衆科学やオカルトの領域に踏み込み、これら新作言語のよって来たる源をそうした「怪しげな」領域に探り出そうとする。ヘッケル、ハルトマン、フラマリオン、そしてとりわけデュ・プレルなど、今ではもはやほとんど忘れ去られ、図書館の片隅で埃をかぶっている類いの蒼古たる文献類を渉猟し、これらを広く深く読み込んでシュレーバーの思考とドッキングさせようとする努力は並大抵のものではない。そのような努力の結果、本論文は、シュレーバーについてのたんなるモノグラフィーの域を超えて、世紀転換期のヨーロッパの隠れた地下水脈を構成しているさまざまな思考を明るみに出そうとする、広がりのある意義深いものともなっている。そこでは、シュレーバーのテキストが、当時の宗教観、科学観、人間観、言語観、身体観、靈魂観を縦横に交錯させつつ一点に収束する場として、浮かび上がっている。本論文は、そうした意味で、現代のわれわれが捨て去り、忘れ去っていった思想史上の重要な葛藤を再度俎上にのぼせ、それがもつ現代的な意義を問いかけるすぐれた問題提起の論考ともなっている。

(三) 最後に本論文には、そのタイトルにも強調されているように、シュレーバーの症例にもとづいて、言語とは何かというきわめて現代的な問題に一石を投じようとする熱い志向が終始貫かれている。シュレーバーの病が言語の病であると規定され、雑音（無意識）から生じる意味、語らされる（「筆記制度」）と同時に語る（「描き出し」）自己の分裂、神（目的論）と自然（機械論）、他者と主体のあいだで折衷的に揺れ動く言語といった問題が、言語哲学的な解答を求める通奏低音となって論を貫通している。本論文が、こうした言語について新たな視点を打ち出せているかどうかについては、たしかに、なお自分なりの独自の立論が不足しているような観もあり、欲を言えば、同じようにシュレーバーのテキストを言語論として扱ったラカンの論文などとの自覚的な対峙を論のなかに持ち込むことによって、新規な視点も出てくるだろうと期待されるところである。しかし、それは本論文の今後の課題として引き継がれてゆくべきものであり、論文の現段階では、そうした問題へと肉薄しようとする並々ならぬ熱意と、そこへと向かってゆく緊張感あふれる歩みのなかに、今後へとつづく評価すべき点を多々認めることができる。

以上を総合して、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年8月6日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：                      年                      月                      日以降